

英語科編 1-7

第1-7号

平成22年2月5日

1513

33 ガリ版刷りの英語教育

山邊 吉也東京昭和4東高在職4〜23
 授業において、生徒に配布するプリント類が、ガリ版刷りのものであったことを知る教員は今後ますます減少していくと思いますが、昭和の時代は、全てのプリントが手書きのガリ版刷りのものでした。このようなプリントを毎日のように生徒に配布して授業を行なったのは、山邊吉也です。後に文部大臣にもなる卒業生の永井道雄(49回)は、山邊の授業について、次のように記しています。「中学一年を通して、山辺先生は、英語のリーダーを、ほとんど使わなかった。そのかわり、先生は毎日のように、発音記号だけで書いたガリ版の紙を配った。アルファベットを習ったのは、3学期に入ってからのものであり、いまはほとんど覚えていないが、中学一年のときには、発音記号で読むことも書くことも自由であった。」
 『私の外国語修業』中公新書 1970より

残念ながら、山邊のつくったプリントが残っていないため、それがどのようなものであったかについては分かりませんが、附属中ではパーマール以来の「新教授法」が続いていたことを知ることが出来ます。

34 クエストヨンボックス
 石橋幸太郎 福岡県 大12東高師卒
 在職昭和4〜20 東京教育大教授
 昭和35年から38年の3年間にわたって全15巻もの『クエストヨン・ボックス』という書が編纂されていますが、その最終巻の15巻目が筆者・山口の手元にあります。その中身を見ると、『英語教育』に寄せられた、当時の中学校や高等学校の教員の、英語に関するさまざまな疑問について、『英語教育』の編集を担当していた旧東京高等師範学校、東京教育大学の教員、さらに、パーマールがつくった英語教育研究所(後に名前を変えて語学教育研究所という)に集う人たちが、丁寧に一つ一つのことがらについて答えています。例えば、英国の天文台のあるGreenwichの発音は、どうして「grin·n·wit」ではなくて、「grinid」なのかなどの、ちよつとした先生方の疑問などがあります。そして、その答えやそれらをまとめ、著書の編集の中心となっていたのは、石橋幸太郎です。そもそも、このクエストヨンボックスというアイデアは、パーマールが始めたようですが、それを戦後も引き継いで、戦後の英語教育に活かそうとしていたのは、やはり附属中学で教鞭をとったことのある教官であったようすです。

ところで、石橋は、東京高等師範を卒業すると、埼玉県の熊谷中学・茨城県の龍ヶ崎中学の教官を経て附属中学の教官となりました。附属中の教官となった石橋は、『中等教育研究』誌上で、自らの英語教育の実践研究を掲載するだけでなく、他の教官とともに教科書を編纂し、さらに、オグデン・リチャーズ共著で難解をもつて知られていた『意味の意味』という著書なども翻訳するという勉強をしました。

そのような石橋の英語の授業については、教え子や同僚などによる『追悼 石橋幸太郎先生』(石橋先生追憶会昭和55。非売品の中に、例えば音楽家の芥川也寸志が、彼について、戦時下にあつても芸術を愛していたことなどの想い出と一緒に語られています。また、石橋自身の活動に就いては、自らの『英語字覚え書』(昭和33)、『書斎随想』(昭和43。両著とも吾妻書房)に語られています。



35 若き天才英学者の死
 山路 太郎 三重昭和5東高師卒在職1

戦前の東京高等師範学校の教授たちが中心になって、英語教育が困難になり始めた昭和10年代に、監修・企画した英語に関する研究著書シリーズに、「英友叢書」というものがあります。そのシリーズが何巻まで続いたかについては調べていませんが、その第6巻に『英詩文 実践解釈考』(興文社刊 昭和14)というすばらしい著書があります。中身は、言語学を駆使した英詩の解釈学で、著者は山路太郎です。その著書がどのようにすばらしいのか、また、山路太郎とはどのような人物であったのか、などについては、「跋」に福原麟太郎の解説があります。それには、おおよそ次のように書かれています。

山路は、伊賀上野の大きな造り酒屋の長男として生まれ、上野中学から東京高等師範、東京文理大を卒業し、文理大在学中に、当時教鞭をとっていた青年詩人William Empsonに教わり、彼の先生であったRichardsonの研究をし、その言語学の方法を心得ました。附属中学の先生になると、ダイレクト・メソッドの心理学的基礎を求めた実験を行い、その成果を発表すると、それは、画期的な研究であるとして絶賛されました。「これは日本の、あるいは恐らく世界の外国語教授法で、初めて試みられた外国語学習についての心理的実験報告であるかも知れない。『英語で考える』というものは、ただ、ひとつのアイデアとして受け入れられて、それは何であるかは今まで誰も論じなかったが、山路君は、われわれの場合、日本語の思考組織が英語の思考組織に、その都度組みかえられなければならない。『英語で考える』といふことはできない。そして、組み換えの手続きの素早く行なわれるために、口頭練習が効果を持つことを報告している。」このように、山路は英語学研究者として将来を嘱望されるようになりしました。しかし、彼は一方で健康にすぐれず、慰安といえは専ら映画を見ることだけで、「英語青年」には、毎号「映画雑感」などを掲載し、その他の時間はがむしやりに勉強したようです。そのことがたつたのか、彼は、若干数え年31歳で惜しまれつつ亡くなりました。『英詩文 実践解釈考』は彼の唯一の遺著です。